

私がなぜ現在の科目を選んだか

「乳腺内分泌外科」

信州大学医学部外科学教室
乳腺内分泌外科学分野

小野真由

小さい頃から手を動かすことが好きで、学生自体も漠然と、自分の手作業が治療に活かせる科を考えていました。在学中に当時50代だった父が食道癌と診断され、父の診断、手術、術後治療、そして再発後の治療を家族として見守りました。初期研修医になり、父の通院先とは違う病院で研修を始めましたが、初めて私に一人の医師としての意見を求めてきた患者は父で、3か月後には私が医師になって初めて終末期を一貫して看取った患者にもなりました。父はとにかく変わった人で宇宙人レベルでしたが、そんな父が最期になって少し見せてくれた実に人間らしい弱々しさと、その一方で癌に蝕まれていく身体に反し自分は明日も生きると信じて疑わない強靱な精神力は圧巻で、まさに私の知る宇宙人のような父は最期まで健在でした。

私がなぜ現在の科目を選んだか

「皮膚科」

信州大学医学部皮膚科学教室

高沢裕子

私は旧研修制度の最終学年でした。当時はポリクリを回り、卒業前に科を決めることが一般的でした。私達の班は皮膚科のポリクリからスタートしました。教科書を開くと大変な写真が多く載っており衝撃を受けました。初診の患者さんの予診もさせていただきましたが、背中に1センチ程度の黒いできものがあり、黒色を呈する腫瘍をいくつか鑑別に挙げました。先生は病変をみた後、手で黒色の角化物をぐいぐい押し出して、あっという間に診察が終わりました。診断は巨大面皰でした。皮膚疾患はもともと身近な存在でしたが、目に見える現象が分かるようになったら面白そうだなと興味を持ちました。また皮膚科は、自分にとって将来にわたってしっかりと続けていくことができる科ではないかと考えたことも大きな理由です。

この父という強烈な癌患者の残像は、働き盛りで闘病する癌患者さんの姿と重なり現れ、呪縛のように私に付きまといました。乳癌・甲状腺癌領域の患者層は父よりも更に若く自分なりの葛藤がありましたが、そんな私に、一緒に若い患者さんを助ける癌診療をやろうとぐいぐいと先輩が引きずりこんでくれた縁もあり、呪縛と向き合う覚悟で外科に入りました。若年患者の癌治療に携わるために越えなければいけない問題はいくつもありましたが、上司や同僚と「共に手術場に立つ」外科ならではのつながりの強さに守られ、様々な患者さんとの出会いや別れがあり、今では父という癌患者も呪縛ではなく私に勇気を与えてくれる存在になっています。乳腺内分泌外科医としてほぼ途切れなく診療に携わることができているのは、家族のように信頼できる指導医、先輩、後輩に恵まれたことと、上司や同僚、そして患者さんたちが、自分を医師として、また人間として育ててくれたという思いから、診療を続けることで恩返ししたいという気持ちがあるからです。そう思える人との出会いがある、乳腺内分泌外科はそういうところですよ。(信大平22年卒)

皮膚科医となって、長い年月が経ちました。経験を積み重ねるほど皮膚科学の奥深さを感じます。外来では患者さんは多種多様な主訴で来院されるため、それぞれのニーズに答えるためには幅広い知識と経験が必要です。慢性疾患も多く「痛いのもつらいけど、かゆいのもつらいね」とは患者さんからよく聞かれる言葉ですが、何とかしようという思いで診療にあたっています。皮膚症状から、何を考え、どう診断するか、どうすればよくなるのかを探っていくのは、時には地道な作業になりますが皮膚科の醍醐味でもあり、長年悩まされていた症状がよくなったときはとても嬉しく思います。私が入局した当初とは、抗体製剤や分子標的薬の普及などにより治療の幅は格段に広がり、また悪性腫瘍の治療も大きく変わりました。大学病院では悪性腫瘍の患者さんも多く、診断や治療には体系だった深い知識が必要であり、終末期には医師として、人間としての対応力が問われます。私はまだまだ未熟で一歩ずつ階段を上っているような状態ですが、最善の医療を提供できるよう、根気強く取り組んでいきたいと思っています。(信大平15年卒)